

新刊 紹介

"I love my books as drinkers
love their wine; The more I
drink, the more they seem
divine."

笹田友三郎(経済学部教授)著「地域の科学」

東京・紀伊国屋書店、新書判一八九頁、定価
二五〇円。

第二次大戦後、アメリカの数多くの経済学者が、地域計画を進めるうえの新しい経済学的なアプローチのしかたとして「地域研究」に非常な熱意を示すようになった。本書は、このような新しい科学分野の全般を、少なくともわが国では最初の形で紹介したユニークな手引書である。

しかし、「やさしい入門書という当初のねらいからはずれてしまった」と著者があとがきで「述懐しているように、その内容

は単なる道案内のだけのもではなく、かなり高度な理論が骨組みになっており、経済学を専攻する学徒や一般の実務家の手引書としても、歯ごたえのある水準の高いものになっている。それに、最近の「地域分析」には計量経済学的方法がとり入れられてきているので、本書でも数学的なモデル構成の手続きが示されており、そのため、たとえば産業連関分析におけるマトリックス、地域計画におけるリニア・プログラミングなどについても、ある程度の素養を必要とする。

「地域研究」は原理的には経済学に固有のものであり、また自然環境など地理学では、当然、問題とされるべき諸種のディテールが捨象されるものなのであるが、このことに関して、本来、地理学畑出身の著者は「地域研究」が「地域に関連するすべての研究に共通のものであるにちがいない」という信条を披瀝している。

なお、巻末に付されている文献一覧は、各章に関する参考文献のほか、より進んだ研究のための文献や入門書などが、随時、手短かな解説をまじえて列挙されている点

は親切で、しかも著者の地道な研究の累積がうかがえる。また本書の中には数多くの英語読みのままの用語が出てきて、多少の読みづらさも感じられようが、これはまだ数多くの概念が邦訳名として定着していないというこの学問分野の若さを物語るものである。

(木村)

安中市誌編集委員会編「安中市誌」 群馬県
安中市役所、B5判一〇〇八頁、頒価二、
五〇〇円、送料一六〇円。

安中の歴史篇以外に自然篇、文化篇にもわたる詳細な調査報告集を内容としている。

昭和三十二年、市教育委員会内に編集委員会設置以来八カ年を費して成り、昭和二十四年七月、オランダ使節団政治顧問ヴァン・グリック氏から藩主板倉勝明の事蹟照会を受け、歴史編纂の必要を市当局が痛感してから十六年を経た。

各篇、各項、それぞれ地方在住専門家に委嘱して成った詳細な調査報告で、編集主任中沢多計治、副主任木暮勝弥、前市教育長・編集委員会事務局局長春原千幹諸氏の労に負うところが多く、永年にわたりこの事

業を支持した市会議長内堀禎朗、市長萩原弘、前市長田中龍三諸氏はか多数篤志家の深い理解を多とせねばならぬ。

歴史篇の執筆を進めるに当り、同市とその付近に散在する地方文書を多量に掘出しこれを収録し、史料引用の部分但凡そ全巻の三分の一を占めているので、今後の地方史研究に貢献するところが多いと思われる。新島先生の伝記研究に当って、新島家の興ってきた安中の背景を知る上に貴重な史料を多数収め、新島先生の海事思想に影響を与え、函館の事情を詳しく教えたと伝えられている藩儒山田三川に関する記載や、藩における新島家の地位を知り得る藩士の分限帖も収められ、全巻を通じて新島家の故地安中地方の全巻をよく浮び上らせている。

(T)

山室武甫(校友)著「人道の戦士―山室軍平」
東京・玉川大学出版部、B 6判二八九頁、
定価四五〇円

著者の山室武甫氏は山室軍平の長男にあたる方である。山室軍平についての著作は、英文を含めて、すでに十数種も発行されている。著者は、この山室伝を書く動機につ

いて、「マタイ、マルコ、ルカの共観福音書と呼ばれる三つのキリスト伝の出た後に全く新しい角度から霊的な第四福音書としての『ヨハネによる福音書』が著わされたように、私も微力ながら今少し遠い年月と広い世界的視野との角度から、主として新しい資料を盛って、山室伝を書きたく念願した。」と述べている。山室軍平は一八七二年(明治五年)九月一日に岡山県に生れ、一九四〇年(昭和十五年)三月、六十八歳で永眠している。『救世軍の山室』として、国内における活動のみならず、国際的にもきわめて集中的な活動をした。本書では、その生い立ち、反骨気鋭の少年期、一八九九年(明治二十二年)新島襄を慕って同志社普通学校へ入学した頃の信仰と実践、救世軍への入軍『平民之福音』発刊にはじまる熾烈果敢な山室軍平の諸活動が生彩のある筆致で語られている。とくに、金森通倫、大隈重信、島田三郎、植村正久、内村鑑三、渋沢栄一、幸徳秋水、留岡幸助、賀川豊彦、といった日本の近代史上に重要な位置をもつ人物との交流、山室の人物像を物語る事実はきわめて興味ぶかい。輝かしい落陽と

いう項では、祈禱の人、説教者として、文筆家として、社会事業家として、私生活についてという類別で記述がなされているが、その多方面にわたる事蹟と開拓的な仕事が簡潔に描かれて、山室の偉大さについて印象をうける。私は山室軍平―救世軍の廃娼運動に関心があって、資料をあつめているが、とくに社会事業の展開にとつて、山室軍平の果たした役割は領域の開拓と主体性の確立の軸心となった。これは本書の紹介とは関係ないが、民間社会事業に働くことを志す学生のために山室軍平を記念する基金を創設して、山室の志したものを現在に生かすことなど考えられぬものであろうか。本書にも一貫してのべられているが、山室軍平の平民主義、それは、新島襄の同志社のキリスト教精神の基底であり、その徹底した実践者が救世軍の山室であった。本書によって同志社立学の本旨としての平民主義とはなにかという鮮烈なイメージを得ることができる。さらに、父を語るぐとといったユニークな文章のスタイルもあつてすぐれた興味ぶかい伝記となっている。

(小倉襄二)